

ながら「現実の別の可能性」を開こうとする「主体」を取り巻く、無数の言説的・非言説的なミクロな実践である。「施設」制度の内と外で、一人で一緒に生きようとするすべての人に薦めたい。フーコー『精神医学の権力』(筑摩書房)とリわけその「講義要旨」と読み合わせる問題はさらに先鋭化する。

2 ミシェル・フーコー『言説の領界』慎改康之訳、河出文庫、二〇一四年

フーコーのコレージュ・ド・フランス開講講義の新訳。この新訳により、一九七〇年代以降のフーコーの講義や著書の哲学的射程を正確に把握することができる。とりわけ「真と偽の対立」「真理への意志」についての分析は、権力・知・論を越えて、むしろ最晩年の「真理の体制」と「自己」について語る主体との関係」という問題系を予告する。

3 Philippe Chevalier, Michel Foucault et le christianisme, Paris, ENS ed., 2011

フーコーとキリスト教の関係について徹底的に追求した書。晩年のフーコーによる、「真理のわざ」(告解や良心の検討)の執拗な分析の意義について考えるためのたしかかな出発点。佐藤彰一『禁欲のヨーロッパ』(中公新書、二〇一四年)の心性史的アプローチとの交差も興味深い。

4 『西洋近代の都市と芸術』(「ローマ」「パリ」「ロンドン」) 竹林社(全八巻刊行予

斎藤成也

(人類学)

- 1 印東道子『南太平洋のサンゴ島を掘る』女性考古学者の謎解き』臨川書店・フィールドワーク選書、二〇一四年
 - 2 川村伸秀『坪井正五郎 日本で最初の人類学者』弘文堂、二〇一三年
 - 3 塩田光喜『太平洋文明航海記』明石書店、二〇一四年
 - 4 早坂俊廣編『東アジア海域に漕ぎだす』文化都市 寧波』東京大学出版会、二〇一三年
 - 5 松原隆一郎・堀部安嗣『書庫を建てる』一万冊の本を収める狭小住宅プロジェクト』新潮社、二〇一四年
- 1 なかくオセアニア考古学をてがけてきた著者が、フィールドワークの実際を語った書。ヤップ島から東に一八〇キロほど行ったファイヌ島で発掘した遺物が謎を生む。ピーズのひとつがベネチア製だった。台湾原住民が珍重するトンボ玉の最古のものがやはりベネチア製だと聞いている。
- 2 ジャーナリストの著者は山口昌男から坪井の存在を教えてもらったとか。日本の人類学の大先輩なのだが、死後ちょうど百年後によくやく世にでた伝記。なぜ坪井がコロポックル説にこだわったのか、なんとなくわかった気がした。

定) あるときは堅実に、あるときは斬新に切り込む諸論文が、デジタル化する社会において、重厚かつ細やかな装丁のもとに出されつつあることに素直な感慨を覚える。

李 孝徳

(ポストコロニアル研究)

公然と植民地主義が「再稼働」するのを禍々しく感じさせられた一年であった。そのため選ぶ書物もそれに関わるものになる。

1 加藤直樹『九月、東京の路上で』ころから、二〇一四年

沖繩の思想家新川明は「日本人の好戦性が怖い」と言ったが、本書は関東大震災時の朝鮮人虐殺を現在に結び直すことでその怖さを体感させる。歴史記録文学の傑作である以上に、現在の日本のリアリティを凄まじく逆照射する書である。

2 新城郁夫『沖繩の傷という回路』岩波書店、二〇一四年

傲慢で浅慮な宗主国人の植民地主義的暴言に対する怒りが、かくも清冽で強靱な思想を生み出すことに賛嘆を禁じ得ない。と同時に、「私」が「私」であることで何を学び、何を継承し、何を教えられるのかを深々と考えさせられた。

3 波平恒男『近代東アジア史のなかの琉球

併合——中華世界秩序から植民地帝国日本へ』岩波書店、二〇一四年

琉球処分を琉球併合と見直し、日韓併合と比較することで、東アジア近代における日本の覇権のポリティクスがこれまでとは異なる風貌を帯びてくる。沖繩の現在から生み出された批判的歴史学のひとつの達成である。

4 アルジュン・アバドゥライ『グロバリーゼーションと暴力——マイノリティの恐怖』藤倉達郎訳、世界思想社、二〇一〇年

恥ずかしいことに本書をたまたま手にとつてアバドゥライの存在を知った。原書の刊行は少し前だが、現在、世界各地で荒れ狂う人種主義の暴力やエスノサイドの機序をこれほど説明しているものはないのではないかと思う。

5 遠藤正敬『近代日本の植民地統治における国籍と戸籍——満州・朝鮮・台湾』明石書店、二〇一〇年

戸籍という制度が日帝の植民地主義と骨格みであったことを見事に論証してみせる本書に多くを教えられた。日帝のセクシズムとパターナリズムとレイシズムを支える基盤であった、この鶴のような制度の成立と展開は「日本」の社会性を考える上で極めて重要なものであるという感慨を抱いた。

二〇一四年二月に早世した友人の民族

学者が遺した書。マゼラン、ブーガンヴィル、キャプテン・クックらにはじまる西洋人の探検によって知られるようになった太平洋の島々は、十九世紀に世界経済の波におおわれたパプアニューギニアについても、太平洋戦争の部分もふくめて詳述されている。

4 天一閣蔵書楼をつくった中国十六世紀の文人范欽の話が秀逸。蔵書が散逸せず現代に伝えられているのは、うらやましい限り。最初は五千冊ほど。明代には四万冊以上の蔵書家が二三名もあり、最高は三〇万冊！乾隆帝に保護され、古今圖書集成一万冊を下賜されたことも、この書庫が続いた大きな要因であろう。

5 こちらは現代の書庫建築、かくあるべしとでもいおうか、模範的かつユニークな書庫建設までのドキュメンタリー。実家の仏壇を納める場所をコンクリートのなかに作ったというのもおもしろい。でも一万冊はちょっと少ない。わが懐無堂の蔵書はすでに一万五千冊を越えている。

鎌田 慧

(ルポライター)

1 加藤周一・樋口陽一『時代を読む』(岩波現代文庫)

- 1 勝手気ままな政府になっても、ひとびとは今日の生活に精一杯で、さほど悪い時代とは考えない。豊かになったのか、貧しくなったのか。戦争の記憶、加害と被害の恐怖が喪われるとこんな時代を引き出す。「解釈改憲が進むにつれてすこしずつ水で割っていくように憲法に対する人びとの関心も薄れていくつある」と加藤周一がいい、樋口陽一が「外堀を埋められても内堀を守ろう」という、「護憲的改憲論」を批判している。九七年の対談が、昨年五月に刊行された。憲法など歯牙にもかけない首相が登場しても、国民は今日の生活で精一杯、それを支えている。
- 2 アメリカの闇を暴いて亡命したCIA職員エドワード・スノーデンの出現は驚愕的事件だった。国家の前ですべての人びとが裸にされている。外国の首相まで電話を盗聴されていた国家機密を、ひとりて暴露した正義感、ビデオゲームの英雄によって養われた、というの衝撃的。